

# 御伽草子の共通語

染 谷 裕 子

## 一 はじめに

御伽草子、室町時代物語、中世小説などと呼ばれる数百編がある。それらの作品群は文学史的に一ジャンルとして扱われているが、作品の題材は多様であり、伝本の状態も様々である。市古貞次博士は『中世小説の研究』（東大出版会）でこれらの特質として「作者の變動・讀者層の拡大」「取材範圍の廣汎・趣向の多種多様」「短篇、説話的」「類型的」「教訓的、啓蒙的、功利的」「佛教思想の濃厚」をあげ、さらに「文章表現は概して單純・稚拙であり、内容には荒唐無稽な類が多いといへるであらう」と述べておられる。個々の作品の語をとりあげる前の段階として、このような共通項が国語学的にも捉えられないか。それが本稿の試みである。

これらの作品群は語彙の立場から「決まり文句が多い」などと指摘されてきたが、いくつかの作品を対象に語

を任意に取り上げて論じる場合が多かったように思われる。それはそれで御伽草子の用語の特色の一部を示しているのであるが、語彙全体を語るには不足であろう。平安以来のありきたりの語の中にも取り上げるに価する語があるのではないか。そんな期待を持って本稿では代表的作品を対象にその作品間で、共通性の高い語（以下、「共通語」と呼ぶ）を探ってみる。<sup>(1)</sup>

なお、御伽草子を対象とする場合テキストの問題がある。数百編といわれる作品群の中から何を選ぶか。先学の研究では、「洪川版」一二三編を取り上げるものが多かったように思えるが、これらは必ずしも御伽草子全体の中核をなす作品群とは言えないことが既に文学研究の立場から指摘されている。笹野堅氏は、御伽草子の形態がその享受者層の必要性に応じられたことを指摘された。<sup>(2)</sup> 絵巻の草子化という一つの方向は御伽草子の共通項でもある。そこで、御伽草子の形態面の特色に視点を当て、「異本を多数持つ」「絵を伴う形態の本が多い」「江戸初期までの写本を持つ」という二つの条件を満たす作品を少々冒険ではあるが自分なりに選択してみた。本稿の目的が既に述べたように、室町時代に多数作られた御伽草子の共通項を言葉の面から探ることにあるからである。選択した作品は次の二十三作品である。多くの伝本の中でできるだけ古く、絵を持つ本を『室町時代物語大成』一―十三（角川書店）の中から選んだ。<sup>(3)</sup>（本文中の絵詞も含む）

- 1 朝顔の露（赤木・室町後期絵入写本）
- 2 巖島の縁起（慶応・近世初期写本）
- 3 岩屋の草子（天理・江戸初期奈良絵本）
- 4 花鳥風月（文禄四年写奈良絵本）
- 5 貴船の本地（慶応・室町後期写本）

御伽草子の共通語

- 6 熊野の本地（天理・室町末大型奈良絵本）
- 7 小男の草子（高安六郎旧蔵・室町末江戸初期間奈良絵本）
- 8 西行物語（書陵部・文明十六年写本）
- 9 さごろも（慶応・室町末写本）
- 10 しぐれ（大東急・永正十七年写本）
- 11 四十二の物あらしひ（赤木・室町末写本）
- 12 釈迦の本地（学習院国文研究室・室町末江戸初期間写本）
- 13 浄瑠璃十二段草子（赤木・室町絵巻）
- 14 雀の発心（赤木・室町末絵本）
- 15 田村の草紙（慶応・室町末写本）
- 16 天狗の内裏（慶応・室町末写本）
- 17 天神の本地（天理・室町末絵巻）
- 18 鉢かづき（慶応・室町末江戸初期間写本）
- 19 一本菊（慶応・室町末江戸初期間写本）
- 20 富士の人穴草子（赤木旧蔵・慶長八年写本）
- 21 文正草子（赤木・室町末写本）
- 22 物くさ太郎（大阪女子大・慶長頃卷子本）
- 23 横笛滝口の草紙（慶応・室町後期写本）

## 二

さて、以上二十三作品の自立語の総数は異なり語九、七五〇語（延べ語九二、五九六語）である。各作品の言語量に差がある点が問題かもしれないが、とにかくこれら(4)の語の中で多くの作品で用いられる「共通語」を取り出してみる。三分の一以上の作品——七作品以上に用いられる語を取り出すと一、〇三二語を取り出すことができる。これらは全異なり語数の十一パーセントを占める。

## 御伽草子の共通語彙表

## 二十三作品

あり（有） いかなり いま（今） うへ（上） おもふ（思） かた（方） かへる（返） かやう ころ（心） こと（事） この これ さふらふ す（為） すがた（姿） その たまふ とき（時） ところ（所） なか（中） なし（無） なる（成） のち（後） はな（花） ひと（人） ふかし（深） まこと（真） また（又） まゐる（参） み（身） みゆ（見） もの（物・者） よ（夜） よし（由） わが（我）

## 二十二作品

いふ（言） いる（入）四段 うち（中） かく（斯） かぜ（風） きく（聞） くに（国） さて さり（然） する（知）四段 それ ただ たつ（立）四段 な（名） ほど（程） まうす（申） まします ま

へ(前) まゐらす みる(見) よ(世) われ(我)

二十一作品

あはれ(哀) いづ(出) いのち(命) いろ(色) おほす(仰) かかり(斯有) かぎり(限) か  
く(掛) 下二 きみ(君) ごらんず(御覧) さらに たてまつる(奉) たまはる(賜) ため(為) つ  
き(月) とし(年) とる(取) なす(為) なに(何) なみだ(涙) にようばう(女房) ひ(日)  
ひとり(一人) みち(道) みやこ(都) ゆく(行) ゆめ(夢) ゆゑ(故)

二十作品

あまり ありさま(有様) いかが いづく(何処) いまだ うし(憂) おなじ(同) おはします か  
くて かの ころ(頃) こゑ(声) さ(然) さき(先) すこし(少) すゑ(末) たつ(立) 下二  
たづぬ(尋) たぶ(賜) つく(付) 四段 つみ(罪) つゆ(露) ひとびと(人々) まつ(待) まま  
め(目) やう(様) やがて よし(良)

十九作品

あそばす あと(後・跡) あふ(合) ある(或) いとま(暇) うけたまはる うれし(嬉) おく  
(置) 四段 おくる(送) おと(音) おぼしめす おほせ(仰) おもひ(思) かかる(掛) かく  
(書) かず(数) かたち(形) かたる(語) かなふ(叶) くち(口) こ(子) さす(差) すぐ  
(過) すむ(住) そで(袖) ちぎり(契) て(手) てん(天) とふ(問・訪) とも(友・伴)  
とり(鳥・酉) ながす(流) なさけ(情) なほ(にし) 西(西) のぼる(上) はじめ(始・初) はは  
(母) はる(春) ほか(他) ほとけ(仏) みな(皆) むかし(昔) めす(召) もつ(持) もと

(下) やま(山) わたる(渡) をりふし(折節)

十八作品

あく(明・開) 下二 あさし(浅) あひだ(間) いそぐ(急) いたはし いたる(至) いちど(一度) いつ うす(失) おぼゆ(思) かみ(神) かみ(髪) きたる(来) きこゆ(聞) くるし(苦) ことば(言葉) こひし(恋) すつ(捨) ち(地) ちから(力) つく(付) 下二 なく(泣・鳴) なにごと(何事) ならひ(習) のたまふ はじむ(始) ひく(引) ひま(暇) ふしぎ(不思議) ふたり(二人) へんじ(返事) まづ やすし(易) よろこぶ(喜) よむ(読) よろづ(万) ゐる(居)

十七作品

いかで いだす(出) いる(入) 下二 うた(歌) おそろし(恐) おや(親) かげ(陰・影) かなし(悲) かなしむ(悲) かほ(顔) きこしめすく(来) げに けふ(今日) ここ ころざし(志) さすが(さまざま(様々) そら(空) たかし(高) たがひ(互) たま(玉) たれ(誰) ちかし(近) ちぎる(契) ちち(父) つかひ(使) つくる(作) ながむ(眺) なげく(嘆) はや(早) ひとつ(一) むすぶ(結) むなし(空) ものがたり(物語) をし(惜)

十六作品

あら うらむ(恨) うらめし(恨) えん(縁) おほし(多) おぼす(思) およぶ(及) かはる(変) けしき(気色) ここち(心地) ことわり(理) しかり(然) した(下) しばし ただいま たちいづ(立出) たとふ(譬) たもと(袂) つきひ(月日) とどまる(留) なごり(名残) はるか

(遥) ふぜい(風情) ふね(舟) ふみ(文) ぼだい(菩提) まつ(松) みづ(水) むかふ(向)  
 四段 やや よくよく よる(寄) をとこ(男) をんな(女)

十五作品

あき(秋) あさまし あした いく(生) 四段 いづれ(何) いよいよ うつ(打) うつつ(現実)  
 うまる(生) おく(奥) おつ(落) おはす おほき(大) おもしろし(面白) おもひよる(思寄)  
 おろか(愚) かたはら(傍) きぬ(衣) くぎやう(公卿) くだる(下) くも(雲) こ(此) こと  
 (琴) こと(殊・異) すでに(既) そふ(添) 四段 だいら(内裏) とどむ(留) とぶらふ(弔・  
 訪) とりいだし(取出) なかなか なぐさむ(慰) 四段 にんげん(人間) はかなし はなる(離) は  
 べり(侍) ふく(吹) ふす(伏) 四段 まかす(任) まくら(枕) みす(見) みづから(自) みや  
 (宮) めでたし もし(若) やうやう よろこび(喜) わする(忘)

十四作品

あらはる(表・現) ありがたし(有難) いのる(祈) おもて(面) かたみ(形見) かなしさ(悲)  
 かならず(必) かよふ(通) きゆ(消) きる(切) 四段 くさ(草) ぐす(具) くる(暮) くるま  
 (車) くれなる(紅) くわんおん(観音) こなた こひ(恋) さと(里) さま(様) さやう(左  
 様) したがふ(従) しぼる(絞) だいじん(大臣) たすく(助) たちよる(立寄) たより(便)  
 つくづく つひに とくとく とほる(通) とらす(取) なげき(嘆) など(何故) なみ(波) なん  
 ぢ(汝) にしき(錦) ね(音) ねんぶつ(念仏) ひ(火) ひる(昼) まさる(勝) みかど(帝)  
 みみ(耳) むし(虫) めのと(乳人) やさし(優) やよひ(弥生) ゆくへ(行方) よのなか(世)

中) をしふ(教)

十三作品

あたり(辺) あたる(当) あまた(数多) あやし(怪・卑) いざ いたづら(徒) いやし いろいろ(色々) う(得) うしなふ(失) うつくし(美) うつす(移・写) うれしさ えいず(詠) えだ(枝) おくる(遅) おそし(遅) かひ(効) かへす(返) きる(着) くだす(下) けぶり(煙) ごしよ(御所) こずゑ(梢) さす下二しす(死) しのぶ(忍) すぐる(勝) そこ(底) たのむ(頼) 四段 たのもし(頼) ちちはは(父母) ちゆうじやう(中将) つくす(尽) つよし(強) てんじやうびと(殿上人) はかま(袴) はづかし(恥) ひめぎみ(姫君) ひらく(開) まして まよふ(迷) みす(御簾) みめ(見目) むせぶ(咽) むね(胸) よも△副詞▽ よる(夜) わかし(若) わかれ(別) をしむ(惜)

十二作品

あがる(上) あぐ(上) あつ(当) あはす(合) あふぎ(扇) いとど いへ(家) うく(受) うちながむ(眺) うらみ(恨) おのおの(各々) おもかけ(面影) かくす(隠) かさぬ(重) かふ(変) かみ(上) きさき(后) きた(北) きやう(経) くらゐ(位) こがね(黄金) こよひ(今宵) さだめて(定) しゃう(生) しゃうじ(障子) しゆう(主) しゆつけ(出家) しろし(白) せめて そう(僧) たとひ(縦) ちかづく(近付) 四段 つね(常) つもる(積) とが(科) ながし(長) ながれ(流) なくなく(泣々) なのめ なむ(南無) ねんごろ はら(腹) ひさし(久) ふで(筆) ほとり(辺) みね(峯) むすめ(娘) やど(宿) やどる(宿) やる(遣) ゆき(雪)



ゆふべ(夕) よく《副詞》 わかる(別) わらは(妾) をがむ(拝)

十一作品

あかす(明) あく(飽) あし(足) あそぶ(遊) あふぐ(仰) あまる(余) ありのまま いたは  
しき いちにち(一日) いつしか いでく(出来) いと(糸) いと《副詞》 いまさら うたがひ(疑)  
おとる(劣) おどろく(驚) かほど き(木) くるしみ(苦) こふ(乞) こむ(込) 下二 ころも  
(衣) こんじやう(今生) さかゆ(栄) さだむ(定) さめざめ さん(産) さんにん(三人) さん  
ねん(三年) しく(敷) しづか(静) しづむ(沈) 四段 しばらく(装束) じやうらふ  
(上臈) すなはち すみか(住処) せむ(責) せんじ(宣旨) そふ(添) 下二 そむく(背) 四段 だ  
いじ(大事) たいしやう(大将) たけ(丈) たづね(尋) たび(度) たもつ(保) たゆ(絶) と  
かくとぶ(飛) とほし(遠) なぐさむ(慰) 下二 なつかし(似) ぬし(主) ねがふ(願)  
のる(乗) はし(端) ひかり(光) ひごろ(日頃) ひざ(膝) ひとへに(偏) ふたたび(再) へ  
だつ(隔) ほそし(細) ま(間) まぼる(守) みなみ(南) もてなすもとより もみぢ(紅葉)  
もろとも ゆめゆめ よす(寄) よぶ(呼) わたす(渡) わらふ(笑) をさなし(幼)

十作品

あかつき(暁) あけくれ(明暮) あす(明日) あな《感動詞》 あるじ(主人) あれ いかさま い  
だく(抱) いたし(甚・痛) いづかた(何方) いつくし いとふ(厭) いにしへ(古) いみじ いも  
うと(妹) うぐひす(鶯) うま(馬・午) うみ(海) うめ(梅) えん(椽) おさふ(抑) おもひ  
しる(思知) おもひやる(思遣) かきけす(搔消) かくる(隠) かさねて(重) かすみ(霞) かた

らふ(語) かね(鐘) かれ(彼) きたのかた(北方) くだく(碎) くはし(細) くわほう(果報)  
 けうやう(孝養) こし(腰) ごせ(後世) さくら(桜) ざしき(座敷) さんど(三度) しだい(次第)  
 しちさい(七才) じふごや(十五夜) しゅじやう(衆生) すまひ(住) せきあふ(所も) たから  
 (宝) たちかへる(立返) たつとし(尊) ちゆうなごん(中納言) つかはす(遣) つつむ(包) つ  
 る(連) つれづれ(徒然) てい(体) としつき(年月) との(殿) とまる(止) とりつく(取付)  
 四段 ながらふ なつ(夏) ななつ(七) なぬか(七日) ならふ(習) にほひ(匂) のがる(逃)  
 のむ(飲) ひとつはちす(一蓮) びは(琵琶) ひよく(比翼) ふ(経) ふたつ(二) ふゆ(冬)  
 ほんぶ(凡夫) ます(増) みぐし(御髪) みだる(乱) みつ(三) みとせ(三年) みなみな  
 (皆々) わかぎみ(若君) われわれ(我々) わろし(悪)

九作品

あざやか(鮮) あし(悪) あの いし(石) いつしゆ(一首) いつつ(五) いとけなし(幼) い  
 とほし うづき(卯月) うら(浦) おこなふ(行) おに(鬼) おのれ(己) おぼし(思) おもむく  
 (赴) おやこ(親子) おる(降) かきくどく(掻口説) かしづく かたじけなし かねて きく(菊)  
 きさらぎ(如月) きのみ(昨日) きやう(京) くわいにん(懷妊) くわんず(観) け(毛) げかう  
 (下向) ごしやう(後生) こたふ(答) こもる こゆ(越) さう(左右) さそふ(誘) しか(鹿)  
 しづ(賤) じふさん(十三) じゃうげ(上下) しゃうず(請) じゃうど(浄土) しゆぎやう(修行)  
 しるし(験) すます(澄) すむ(澄) せうしやう(少将) そむ(染) 下二 だいなごん(大納言) だ  
 う(堂) たしか(確) たたく(叩) ただひと(只人) たに(谷) ためし(例) ち(血) ちやうも

ん(聴聞) ついで つぎ(次) つぐ(告) つるぎ(剣) てう(朝) てら(寺) てんか(天下) と  
 なふ(唱) とら(虎・寅) ながる(流) なく(投) なづく(名付) なほし(直衣) なりゆく(成  
 行) なる(慣) にくし(憎) にくむ(憎) にじふご(二十五) にはか(俄) によん(女人) ぬ  
 らす(濡) のこる(残) のす(乗) のぶ(延) 下二 はやし(早) はる(晴) ひがし(東) ひかず  
 (日数) ひかふ(控) ひとひ(額) ひだり(左) ひとたび(一度) ひとめ(一目) ひとめ(人目)  
 ふえ(笛) ふしをがむ(伏拝) ふびん(不憫) ふむ(踏) ふもと(麓) ふる(触) ふるまひ(振  
 舞) ほけきやう(法華経) まうく(設) みつく(見付) むかふ(迎) 下二 むくい(報) めいど(冥  
 土) めぐる(巡) もつて(以) ものうし(物憂) もん(門) やうやう(様々) やみ(闇) ゆか  
 (床) ゆるす(許) よはひ(齡) よもすがら

八作品

あつまる(集) あに(兄) あはれむ(哀) あめ(雨) あらし(嵐) あんず(案) いかばかりい  
 かやう いき(息) いけ(池) いたはる いはんや(況) おきあがる(起上) おそる(恐) おとす  
 (落) おどろかす おぼつかなし おろす(下) おん(恩) かうむる(被) かがやく(輝) かくれ  
 (隠) かさなる(重) かざる(飾) かしこ(彼処) かしこまる(畏) かすか(微) かた(肩) か  
 たぶく(傾) 四段 かど(門) かは(川) かへすがへす(返々) かへり(返) かんざし(髪状) きす  
 (着) きせい(祈誓) きちやう(几帳) きよみづ(清水) くさき(草木) くび(首) くま(隈)  
 くむ(汲) くらす(暮) くれ(暮) くろし(黒) くわこ(過去) けだかし(気高) けだもの(獣)  
 げんず(現) こうばい(紅梅) こけ(苔) こし(濃) こそで(小袖) ことし(今年) こども(子)

供) さいご(最期) さかり(盛) さだまる(定) さむ(覚) さる(去) さわぐ(騒) さんぜ(三世) しいさい(子細) したふ(慕) しぬ(死) しのび(忍) じふにひとへ(十二単) しょぶつ(諸仏) すう(据) すけ(佐) すごす(過) すすむ(進) 下二 すみ(墨) すみぞめ(墨染) ぜんせ(前世) そば(傍) そもそも(剃) たき(滝) たぐひ(類) たしやう(多生) たのしみ(楽) たる(垂) ぢごく(地獄) ちり(塵) ちる(散) つく(突・築) つたへきく(伝聞) つほね(局) つれなし(てんにん(天人) とし(疾) とむ(止) とりあぐ(取上) なかば(半) なきかなしむ(泣悲) なびく(靡) ならび(並) には(庭) にようご(女御) ねがはくは(願) のく(退) はじまる(始) はじめて(初) はしる(走) はたち(二十歳) はつか(二十日) はて(果) はなやか(華) ははごぜん(母御前) ひきかふ(引換) ひきぐす(引具) ふうふ(夫婦) ふじ(富士) ふししづむ(伏沈) ふぢ(藤) ぶつじん(仏神) ふる(降) ほね(骨) まうしあふ(申合) まつかぜ(松風) ままり(参) みぐるし(見苦) むらさき(紫) めしよす(召寄) めづらし(珍) やくそく(約束) やつ(八) やつす(やなぎ(柳) よも(四方) れんり(連理) わうじ(王子) ゐん(院) ゐ(絵) をみなへし

七作品

あまくだる(天下) あらはす(表・現) いかほど(出立) 四段 いとなむ(営) いぬ(犬) いのり(祈) いは(岩) いはき(岩) いはや(岩屋) うけとる(受取) うすし(薄) うちすぐ(打過) うちすつ(打捨) うちつる(打連) うむ(生) おびただし(思出) おもひたつ(思立) おもひつづく(思続) かうぶる(被) かたがた(方々) かたとき(片時) かなしみ(悲)

かも(賀茂) ぎ(儀) ききいる(聞入) きねん(祈念) ぐそく(具足) くどく(口説) くもる(雲)  
 居) くやう(供養) くわげん(管弦) げんざん(見参) げんじ(源氏) こがる(焦) ここに(接  
 続詞) このへ(九重) ことのは(言葉) こひしさ(恋) こふ(恋) さうし(草子) さく(咲)  
 さた(沙汰) さとる(悟) さはり(障) さびし(寂) しづまる(静) しとね(茵) しば(柴) し  
 ほう(四方) じふく(十九) じふご(十五) じふしちにち(十七日) じふに(十二) しほ(潮) し  
 ま(島) しめす(示) しゃうじ(生死) しゆく(宿) しろがね(銀) すぎゆく(過行) すずり  
 (硯) だいじだいひ(大慈大悲) たいしやく(帝釈) たいめん(対面) たちまち たちち(立居) た  
 とへ(縦) たね(種) たのみ(頼) たまづさ(玉章) つく(尽) つぐ(継) つたふ(伝) つま  
 (夫・妻) つまど(妻戸) てんぢく(天竺) とがむ(咎) とぶらひ(巾) ともしび(灯) ながつき  
 (長月) なさ(無) なる(名乗) なほなほ ならぶ(並) 四段 なんでん(南殿) にでう(二条)  
 ぬ(寝) ぬすむ(盗) の(野) のがれがたし(逃難) のべ(野辺) は(葉) は(端) ほう(方)  
 はからひ(計) はぎ(萩) はしら(柱) はちす(蓮) はつ(果) はらふ(払) はる(張) はるば  
 る ひきかづく(引被) ひとすぢ(一筋) びやうぶ(屏風) ふくむ(含) 四段 ふけゆく(更行) ふし  
 ん(不審) ぶつぽふ(仏法) ふるし(古) ほのぼの ほふし(法師) または(又) まぼろし(幻)  
 ままはは(継母) みあはす(見合) みつき(三月) みどり(緑) むかひ(向) め(女) めしぐす  
 (召具) めしつかふ(召使) もちる(用) もののふ(武士) やうきひ(楊貴妃) やく(焼) 四段  
 やすむ(休) やまひ(病) ゆかし(譲) よ(余) よしよし よそほひ(装) よつ(四) り  
 しゃう(利生) れい(例) わづか(僅) をかし(小野) をはり(終) をる(折) 四段

## 三

山本トシ氏は「平安朝和文学作品の語彙研究 上・下」(学習院大学国語国文学会誌十四・十五号)に於て、『竹取物語』から『讃岐典侍日記』までの平安時代の和文十六作品の中で五作品以上に表れた語を平安和文の一般的な語として掲げた。<sup>(5)</sup>これらの語と御伽草子の共通語を比較してみると、約八割(八二二語)が一致する。さらに、今管見に入る中世の文学作品の索引十六<sup>(6)</sup>を見ると先の八二二語中八一四語が五作品以上に表れる中世文学の一般語でもある。すなわち、平安和文とのみ一致する御伽草子の共通語は次の八語のみである。

わらは(代名)・えん(縁側)・みぐし(御髪)・いかやう・おきあがる・きちやう(几帳)・にようご(女御)

従つて、一般的に御伽草子の文章は平安以来中世にもよく用いられている語で構成されていると言える。

では、平安和文のどのような語が御伽草子では消えて行ったか。「あれ(我)」「いを(魚)」「たとひ(例)」等の平安和文の一般語は「われ」「うを」「たとへ」として、「かばかり」「かたみに(互)」等の平安和文の一般語は「かほど」「たがひに」として御伽草子に現れるように語形の変化や語の交替等の国語史的な変化は免れない。しかし、平安時代の一般語で御伽草子に全く現れない語群を見ていくとさらに次の三つのことが言える。

一 平安貴族の生活と関わりの深い語(官職位階、後宮、衣類、住居、調度の類)が多い

二 接頭語や接尾語の付いた動詞・形容詞・形容動詞が多い

三 複合動詞が多い

擬古物語系の御伽草子であつても、すでに遠い平安時代の生活を描くには限界があつたこと(一)、御伽草子の文章が筋本位で、時、情景、容姿の描写や心理描写の細かい点にまでいきわたつていないこと(二、三)と関連すると思われる。また、「いまめかし」「うるはし」「なまめかし」「らうたし」「あて」「きよら」といった平安時代の代表的な美的表現や、「あさぼらけ」「つとめて」「ようさり」「ついたち」「つごもり」などの時の表現が御伽草子に見えない。これらも、描写の粗雑さと関連してこよう。<sup>(7)</sup>

さて次に、平安和文の一般語と共通しない二割の語について考えてみる。これら語の中には、平安和文と語形が変わっているだけのものもある。「しやうじ(障子)」「しやうぞく(装束)」「かなしみ」「まほる」「かうむる」等は、平安和文では、「さうじ」「さうぞく」「かなしび」「まもる」「かうぶる」等になっている。この二割の語のうち次の語は先の中世文学作品の索引十六でも五作品以上に現れる語である(\*の付いた語は『宇津保物語』『源氏物語』『大鏡』にも見えない語である)。

まします いちど(一度) きたる(来) ち(地) ふしぎ(不思議) \*へんじ(返事) かなしむ  
 (悲) たがひ(互) しかり(然) ふぜい(風情) よくよく すでに だいら(内裏) とりいだす(取出)  
 出) にんげん(人間) くわんおん(観音) なんぢ(汝) \*えいず(詠) くだす(下) ごしよ(御所)  
 しす(死) はかま(袴) まよふ(迷) むせぶ(咽) さだめて(定) しやう(生) しゆう(主) \*  
 しゆつけ(出家) たとひ(縦) ちかづく(近付) いちにち(一日) くるしみ(苦) こんじやう(今生)  
 生) さんにん(三人) さんねん(三年) じやうらふ(上臈) たづね(尋) ねがふ(願) まほる  
 (守) いかさま \*かさねて(重) くわほう(果報) けうやう(孝養) ごせ(後世) しちさい(七

歳) てい(体) \*とりつく(取付) ななつ(七) なぬか(七日) みとせ(三年) いっしゆ(一首)  
 いつつ(五) いとけなし おもむく(赴) おやこ(親子) \*くわんず(観) げかう(下向) \*ごしや  
 う(後生) しづ(賤) じふさん(十三) じやうげ(上下) しゃうず(請) じやうど(浄土) しゆぎ  
 やう(修行) ちやうもん(聴聞) つるぎ(剣) \*てう(朝) となふ(唱) とら(虎・寅) なづく  
 (名付) ひかず(日数) ひとめ(一目) ふしをがむ(伏拝) \*もつて(以) もん(門) \*やうやう  
 (様々) ゆか(床) あはれむ(哀) あんず(案) いたはる おん(恩) かた(肩) \*きせい(祈  
 誓) きよみづ(清水) けだもの(獣) \*こそで(小袖) \*こども(子供) \*さいご(最期) しさい  
 (子細) したふ(慕) \*しよぶつ(諸仏) \*ぜんせ(前世) そもそも そる(剃) たのしみ(楽)  
 ぢごく(地獄) てんにん(天人) とりあぐ(取上) \*なきかなしむ(泣悲) ねがはくは(願) はつか  
 (二十日) ぶつじん(仏神) \*まうしあふ(申合) まわり(参) \*やくそく(約束) やつ(八) \*わ  
 うじ(王子) あらはす(表・現) いとなむ(営) いは(岩) うけとる(受取) おびただし かなしみ  
 かも(賀茂) ぎ(儀) \*ぐそく(具足) \*くどく(口説) けんざん(見参) \*ここに△接続詞▽\*  
 さた(沙汰) さとる(悟) しば(柴) \*しはう(四方) じふく(十九) じふご(十五) じふしちに  
 ち(十七日) じふに(十二) しめす(示) しゃうじ(生死) \*しゆく(宿) てんぢく(天竺) とも  
 しび(灯) のがれがたし(逃難) はからひ(計) ふくむ(含) \*ふしん(不審) ぶつぽふ(仏法)  
 まほろし(幻) みあはす(見合) \*めしぐす(召具) もののふ(武士) よ(余) よそほひ(装) よ  
 つ(四) \*りしやう(利生) をの(小野)



漢語や仏教関係の語が目立つ。これらは御伽草子の中世的傾向を表す類といえよう（数字や数詞は平安和文では対象外である。従って比較にならないが一応挙げておいた）。

四

さらに、御伽草子の共通語一、〇三二語には平安和文の一般語とも、中世文学の一般語とも共通しない語群がある。少々乱暴ではあるが、これらの語が御伽草子の個性を表す語群と考える。列举してみよう（洋数字は使用されている作品数である）。

名詞

- |         |               |            |             |             |          |
|---------|---------------|------------|-------------|-------------|----------|
| 11さん（産） | 10ざしき（座敷）     | 10さんど（三度）  | 10じふごや（十五夜） | 10しゆじやう（衆生） | 10       |
| ひとつはちす  | 10ひよく（比翼）     | 10ほんぶ（凡夫）  | 10みなみな      | 10われわれ（我々）  | 9くわいにん   |
| （懐妊）    | 9によにん（女人）     | 9めいど（冥土）   | 8かんざし（髮状）   | 8くわこ（過去）    | 8さんぜ（三世） |
| 8しのび（忍） | 8じふにひとへ（十二単）  | 8たしやう（多生）  | 8ははごぜん（母御前） | 8ふ          |          |
| うふ（夫婦）  | 8れんり（連理）      | 7いはき（岩木）   | 7いはや（岩屋）    | 7きねん（祈念）    | 7くわげん    |
| （管弦）    | 7だいじだいひ（大慈大悲） | 7たいしやく（帝釈） | 7たまづさ       | 7とぶらひ（弔）    | 7なん      |
| でん（南殿）  | 7ほう（方）        | 7ままはは（継母）  | 7やうきひ（楊貴妃）  |             |          |

動詞

13 さす〔せさす〕 10 かきけす 10 げんず（現） 9 かきくどく 8 ふししずむ 7 あまくだる 7 おもひ  
いだす

## 形容詞

18 いたはし 10 いつくし

## 副詞

11 さめざめ 12 いかほど 10 たとへ（縦） 11 よしよし

## 接続詞

10 そも 7 または

## 感動詞その他

16 あら 12 なむ（南無）

残念ながら、この段階に至っても、国語史的に見て室町時代語らしきものはあまり表れてこない。「あな」から「あら」へ、「たとひ」から「たとへ」へ、「いかばかり」から「いかほど」というような中世的傾向、「うつくし」と同義の「いつくし」の多用や、「せさす」の略された「さす」や「管弦」の語形変化である「くわげん」、「われわれ」「みなみな」といった語など国語史的に指摘できようか。今西浩子氏は、洪川版二十三作品に五作品を加えた二十八作品の御伽草子の語彙調査を行った（『国語語彙史の研究 十』「語彙から見たお伽草子の分類」）。二十八作品の中で共通度の高い語は「どんな作品にでも出てきそうな基本語」ばかりであり、むしろ共通度の低い語の中に御伽草子らしい語が見られるという。本稿で選んだ作品についても同様であり、今西氏の指摘されてい

るような「派生語」や「複合語」<sup>(8)</sup>あるいは、特殊な語形変化を起こした語等<sup>(9)</sup>が共通度の低い語に見られ、これらの語は他資料に見られない室町時代語の特色を表しているのである。

従って、御伽草子は「平安時代以来の仮名文」<sup>(10)</sup>に「偶然ちりばめられた少数のその当時の俗語的表現」<sup>(11)</sup>が拾えるにすぎない文章であることは肯定せざるをえない。しかしながら、他時代や他ジャンルの作品と比較して得られたこれらの語は、ありきたりの語ではあるが、その語群のもたらす一つの方向は、室町時代の御伽草子の作者と読者の意識を反映しているといえるのではないか。

先行作品に比べ、御伽草子は、確かにその登場人物や場面に広がりを見せたが、その内容は甚だ類型的であったという。その点これらの語群が一役買っているといえよう。これらの語群から一つのストーリーを予想させることができる。

天人も「あまくだ」ったかのような「楊貴妃」にも劣らぬ類まれなる美女と貴公子。その契りは「比翼」「連理」と浅からず、やがて女は「懐妊」「産」という経過を経て愛の結晶が誕生する。ここまでは、順調であるが、必ず不本意な不幸が二人の身の上に訪れる。「ままはは」なる人物にねたまれ、「座敷」「にしきのしとね」といった生活から一変して、「岩屋」のごとく人もとだえた場所に追いやられ、無理に別れさせられた恋人は「さめざめ」と泣き、「ふししむ」ばかり。他方、不幸の張本人は、常より仏教の信仰心が厚く（「衆生」「過去」「三世」「女人」等の仏教語に表されている）、決して不幸に狂気することなく行いすまし、「たとへ」「よしよし」等の逆説的表現をもって現世の自分の状況にあきらめ、「南無」「大慈大悲」と、せめて来世で愛する人と「ひとつはちす」に迎えてほしいと「祈念」するのである。そして、その信仰心の厚さゆえに、神仏が「現じ」、幸福をもたらす示現をあたえて「かきけす」ように失せるのである。後はいうまでもなくハッピーエンドである。

すべてがこのパターンではないが、このパターンで人物や場面を適当に変えればいくつもの話ができてくる。こういった御伽草子のストーリーの類型化は、文学研究の立場からしつくされているところであろうが、実は右のような語群がそのストーリーを支えているといえないか。

すでに御伽草子には「決まり文句」が多いことが指摘されている。<sup>(12)</sup>

契りの深さを形容する「ひよくのとり」「れんりのえだ」などと表現し、人間誰しも情けがあることを「いきならねば」と表現し、前世で結ばれた縁を「たしやうのえん」と表現する。(但し「りうてい(流涕)こがる」「しやうれんじひ(青蓮慈悲)のまなこ」「かりようびんが(迦陵頻伽)のこゑ」「ひすい(翡翠)のかんざし」「げんとう(玄冬)のかんざし」「たんくわ(丹花)のくちびる」「せいたい(青黛)のまゆずみ」「いちじゆ(一樹)のかげ」「いちが(一河)のながれ」などは使用範囲が六作品以下で共通語として登場さえない。)以上のほか、「かきけすやうにうせぬ」とか「てんにんのあまくたり」などと右に挙げた語は一定の語と強く結びついて用いられる傾向があり、これらも「決まり文句」とみなしてよいであろう。しかし、単なる表現の上の類型化にこだわりすぎて、ストーリー展開の上で重要な語であることを無視してはいけない。

たとえば、「岩屋」ということばがある。これは、特定の語との結び付きはない。曾田文男氏によれば、上代において「岩屋」は「神あるいはそれに類する貴人の住居」のような神聖な場所としてとらえられていた。平安時代に至り、訓点資料や『源氏物語』に既に中世説話に見えるような「一般人とは断絶されてある場所」としての「岩屋」が登場してくるといふ(『国語国文』四十六ノ五「いはね」「いはほ」「いはや」)。

御伽草子では「いはや」「ゆわや」などと記される。「岩の間」にできた天然のほら穴。また、それを利用した住居。いわむろ。(『日本国語大辞典』)である。八作品に表れ、四十例見え頻度数からいっても気になる語である。<sup>(13)</sup>

御伽草子の中で「岩屋」が読者にどのような印象を与えるか端的に示す、次のような用例がある。

たそや、此岩やゑ、にんけんはなにとてきたり給ふそ

(巖島の本地)

あまのこならずは、なにしに、いはやにすむへきそ

(岩屋の草子)

すなわち、鬼神等のすみかであつて人間などは住まない場所、あるいは住んだとしても賤しい者であつて御伽草子の読者などはとても住めない不気味な場所なのである。こういう場所が出てくることが多い。そして、この「岩屋」は単なる風景描写として出てくるのではない。主人公もしくはそれに準ずる人物が「座敷」とか「にしきのしとね」(共に共通語)に暮らしていたのにもかかわらず、それとは正反対の場所「岩屋」に置かれる不幸な運命に出合うのである。言ってみれば、「岩屋」は主人公の不幸の大きさを知らしめる小道具であるのだ。ここに御伽草子の読者の興味の一面をうかがえる。

御伽草子の特色を表す形容詞といえば、洪川版の冒頭に位置する「文正草子」の影響で「めでたし」であると思われがちであるが、実は「いたはし」ではなからうか。

「いたはし」という形容詞は、右にあげた語の中では非常に使用範囲の広い特異な存在である。「いたはしさ」という名詞形も含めれば、ほとんどの作品(二十作品)で用いられている語である。御伽草子では、現代語と同様な意味で「(他人の状態に対して)心の痛むさま。あわれみを感じるさま。気の毒だ。ふびんだ。いたいたしい。」(『日本国語大辞典』)というように、他者に対する同情の気持ちを表す語である。

ところで、阪倉篤義博士によれば(『日本語の語源』講談社現代新書)、「いたわしい」は、本来自分自身の肉体的・精神的苦痛を表していたのが、後に他者に対して用いられるようになった語であり、「他人の痛みを、その

ままた、自らの痛みとして感じる、「思いやり」あるいは、ことばの本来の意味における「同情」（感情の一体化）を行いやすい日本人の心的傾向」と関わる語であるという。そして、「いたわしい」「いとわしい」「いとわしい」は、「いた」という同じ根から分かれた姉妹語であり、この三者の関係を次のように説明されている。

「いとわしい」と「いとわしい」とは、拒否と包容という、まさに正反対の気持を表わすもののようなのであるが、それを媒介するものは、「いたわしい」という、もと、わが心の痛みを表現した言葉である。胸に痛切にこたえることは、厭い避けたい「いとわしい」ことであるが、しかしまた、他人の不幸や可憐さに目をつぶることができず、それを見たときの切ない思いを、むしろその相手に向かつての思いやりに転じて行くところから、これに共感し、「いとわしい」気持が生まれてくる。

御伽草子では登場人物が、通常では考えられないような不幸な場面に出合った時にこの「いたはし」が使われる。すなわち、幼いのに親と死に別れたり、罪もないのに殺されそうになったり、海や山奥に捨てられたりする時に、その人物に対して用いるのである。「いたはし」と発する人物にとっては「厭い避けたい」ほどの他人の不幸であり、そして、実は、この人物と不幸な相手は愛情で結ばれている場合も少なくない。罪なき科ゆえ死に行く母が生まれたばかりのみどりごに、

かほと、くわほうつたなき、みつからかはらに、やとりたまふ事のいたはしさよ（巖島の本地 上）  
 と言い、川に身を投げ死んでしまった恋人に次のように発する。

されは、此身のくるしみをおもひやられて、いたはしや（横笛滝口の草紙）

御伽草子には、「同情」を表す語として、「あはれなり」「ふびんなり」「むざんなり」等のことばがあるのだが、右のような傾向を持つ「いたはし」が多くの作品に表れる点は無視できない。

なお、「いたはし」は主人公またはそれに準ずる者が大きな不幸に出合ったときに発せられることが多い。御伽草子は、多くの場合ハッピーエンドで終わるのだが、そこに至る過程として「あら、いたはしや」と第三者にいわしめる苦難に登場人物等が出合わなければならぬ——という読者の要求があったのではなからうか。この点は「説経」や「浄瑠璃」で「あらいたはしや」が決まり文句のように表れることとも関連すると思われる。

以上の他にも「産」や「懐妊」あるいは「かきけす」「げんず」「あまくだる」というような語の背景を探ることによって、作者の意識や読者の興味を探っていくことも可能ではなからうか。

## 五

さて、最初に述べたように本稿でとりあげた作品及び伝本の選択には筆者の意向が多分に含まれている。繰り返すつもりはないが、先学の研究を基にできる限り御伽草子らしい作品を選んだつもりである。

ところが、今、洪川版と比較してみると（『御伽草子総索引』（笠間索引叢書91）の洪川版についてのみ参照すると）、本稿の結果は必ずしもあてはまらないのである。四で挙げた御伽草子の個性を表わす語群のうち、洪川版二十三篇で七作品以上に表れる語は次の十二語のみである。

さんど　みなみな　われわれ　たしやう　ふうふ　かきけす　いたはし　いつくし　さめざめ　または　あ  
ら　なむ

さらに、右の語の中でも、例えば「いたはし」は洪川版では十作品で十六例用いられているが、殆どの作品で見られるという本稿で得られた著しい結果とは異なるのである。

ここで、洪川版を再度振り返る必要がある。洪川版二十三篇は大阪の本屋「洪川清右衛門」によって享保頃刊行されたものであろうと言われている。が、これ以前に出版せられた形跡があり、その成立は明暦ないし寛文頃までさかのぼれるという。<sup>(14)</sup> その底本がかなりさかのぼれるとしても、この作品の選択には江戸時代の人間がかかわっているわけである。従って、そこには江戸時代の読者層の興味等が反映されていよう。

詳しい比較は又の機会に譲ることにして、本稿で得られた結果と極端に差のある語についてみると、洪川版について次のことが言える。

第一に「凡夫」「過去」「女人」等の仏教語が使われる機会が少なくなっている。第二に「ふししずむ」「かきくどく」等の悲しみを表す語や、苦痛の種となる「岩屋」「ままはは」等の語が使われる機会が少なくなっている。この二つのことは三で挙げた中世的特色を表す語についても言えるのである。例えば、第一に関連して「生死」「仏法」等は洪川版には殆ど見えないし、他の宗教性の強い語も洪川版の一般語とは言えないものが多い。また、第二に関連して「苦しみ」(動詞「苦しむ」についても言える)も殆ど見えない。以上のことから、御伽草子の持っていた中世的な宗教性と暗さが洪川版で消えつつあると言えるのではないか。

が、これは本稿で選んだ作品の側から見た一方的な見解である。洪川版に用いられる一般的な語を検討しなければならぬだろう。

いずれにしても、江戸時代の版本の類と室町時代の写本を比較することによって、中世から近世にまたがる御伽草子の長い歴史の中で、用語等の中世的傾向と近世的傾向を探っていく必要性を痛感する次第である。



御伽草子の共通語

注

(1) この「共通語」という呼び方は、「言語を異にする集団間に共通の第三の言語」（『国語学大辞典』）としての「共通語」と紛わしい点に問題がある。が、今回は頻度数を問題としていないので「基本語」等と呼ぶことを避け、あえて「共通語」と呼ぶことにする。

(2) 『室町時代短篇集』（笹野堅編・昭10・栗田書店）

(3) 21の「文正草子」と22の「物くさ太郎」は『大成』には掲載されていない。21は慶応大学斯道文庫の貴重なマイクロフィルムを見せていただいた。22は信多純一氏が「松蔭國文資料叢刊4」に影印・翻刻されているものを使用した。

(4) 各作品の自立語の総数は次の通りである。語の認定は宮島達夫氏の『古典対照語い表』（昭58・笠間書院）を規準とした。

| 作品番号 | 異なり語数 | 延べ語数   |
|------|-------|--------|
| 1    | 1,509 | 4,927  |
| 2    | 1,410 | 4,435  |
| 3    | 1,655 | 5,637  |
| 4    | 1,026 | 2,296  |
| 5    | 1,226 | 3,985  |
| 6    | 887   | 2,572  |
| 7    | 558   | 1,270  |
| 8    | 1,631 | 4,682  |
| 9    | 1,356 | 6,878  |
| 10   | 1,548 | 7,109  |
| 11   | 390   | 619    |
| 12   | 1,458 | 4,726  |
| 13   | 2,051 | 6,127  |
| 14   | 531   | 928    |
| 15   | 1,599 | 6,453  |
| 16   | 1,338 | 4,045  |
| 17   | 653   | 1,390  |
| 18   | 1,434 | 4,477  |
| 19   | 1,256 | 5,442  |
| 20   | 1,221 | 3,938  |
| 21   | 1,399 | 6,123  |
| 22   | 903   | 2,146  |
| 23   | 943   | 2,391  |
| 全体   | 9,750 | 92,596 |

(5) 山本氏の抽出した平安和文の一般語は三一〇八語で全異なり語数の約十五パーセントを占めるといふ。

(6) 『松浦宮物語総索引』(菅根順之編・昭49・笠間書院)

『無名草子総索引』(坂詰力治編・昭50・笠間書院)

『新古今集総索引』(滝沢貞夫編・昭52・明治書院)

『広本・略本方丈記総索引』(青木伶子編・武蔵野書院)

『保元物語総索引』(坂詰力治他編・昭56・武蔵野書院)

『平治物語総索引』(坂詰力治他編・昭54・武蔵野書院)

『宇治拾遺物語総索引』(増田繁夫他編・昭50・清文堂)

『海道記総索引』(鈴木一彦他編・昭51・明治書院)

『うたたね総索引』(次田香澄編・昭51・笠間書院)

『平家物語総索引』(金田一春彦他編・昭48・学習研究社)

『東関紀行本文及び総索引』(江口正弘編・昭52・笠間書院)

『十六夜日記総索引』(江口正弘編・昭47・笠間書院)

『改訂版徒然草総索引』(時枝誠記編・昭54・至文堂)

『竹むきが記総索引』(渡辺静子他編・昭53・笠間書院)

『曾我物語総索引』(大野晋他編・昭54・至文堂)

『新撰菟玖波集自立語索引』(広島中世文芸研究会)

(7) 「……精緻綿密な心理・性格の描寫は望むべくもない。人間の生活・環境に就いては、ごく簡単に、概念的に述べる

だけで、情趣とか背景をなすものは、ほとんど描かれてゐない。かつての物語文學に力をこめてとり入れられた四季の推移とか、自然の景觀の如きも、時の経過を示す場合などに、詠歎的に、類型的に、概念的に述べられることがあるにすぎず、さして重視せられてゐない。」（『中世小説の研究』第七章中世小説の諸問題 四一七頁）

(8) 平安和文の一般語の中で御伽草子に全く見えない語もこの類であった。が、御伽草子の場合単独例が多く一般化するに至っていないのが特色である。

(9) 拙稿「御伽草子に現れた異色の語形をめぐって——その史的価値と意味」（『国語と国文学』昭59・8）で紹介している。

(10) 『国語学研究辞典』（明治書院）六〇一頁

(11) 『日本語の歴史4 移りゆく古代語』（昭53・平凡社）

(12) 『講座日本語の語彙4 中世の語彙』（昭57・明治書院）「御伽草子の語彙」松本宙

(13) 「いはや」は七作品二十九例、「ゆはや」は三作品十一例。「貴船の本地」と「田村の草子」は両表記が見られる。

(14) 市古貞次校注『岩波古典文学体系 御伽草子』松本隆信「御伽草子の伝本概観」（『御伽草子・仮名草子』鑑賞日本古典文学26 昭51・7 角川書店）